

飯沢匡喜劇集

V

飯沢匡喜劇集

第5卷

収録作品

無害な毒薬

信天翁（あほうどり）

五人のモヨノ

解題・演劇的自伝（5）

未来社刊

飯沢匡喜劇集 第五卷

一九七〇年六月一〇日 第一刷発行

定価 七五〇円

©著者 飯沢 匡

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三の七
電話(八一四)五五二一代表
振替(東京)八七三八五番

本文印刷 光陽印刷
装本印刷 形成社
製本 今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。

飯沢匡喜劇集

第五卷 目次

無害な毒藥 3

信天翁 あほうどり 107

五人のモヨノ 183

解題 261

演劇的自伝 (5) 272

登場人物

三村 珠代（元プリマドンナ、三村島の持主、

三村工学博士の未亡人）

北林 （三村家の看護婦兼秘書）

リキ （三村家の老女中）

マサ （下働き、土地の漁夫の妻）

近見 （興国私立探偵社社長）

太田 達也（元、高校野球選手）

佐野 利市（土工）

湯本 マツ（ラーメン屋給仕）

岸辺 泰治（ピアニスト）

三橋 五郎（板前）

尾上 克重（昆虫学徒）

真下 里子（幼稚園保母）

根木はるみ（女子大生）

細田 喜作（哲学生）

浜口 頓（漫画家志望）

小山 （東亜人事調査所所長）

大岡 絹子（元、アナウンサー）

江上 昇（目下、浪人の学生）

早田 すぎ（バーのホステス）

伊島初之助（バレー・ダンサー）

大木 雅代（長唄の師匠）

柳沼 美世（インターン）

川本 （刑事）

間宮 （週刊誌記者）

瀬川燕之丞（三村珠代の愛人）

立川 （弁護士）

加納 透（牧師）

第一幕

舞台は、南方洋上の火山列島の一つに建っている、三村家の広間。明治趣味の洋風で、相当に金がかかっている。しかも、主人の奇矯な性格を反映して、例えば、この島には不似合な、ベネチアンゴチック、といった様式が、採用されている。上手に、ペランダに通ずる、大きなフランス窓、欄干のむこうには、フェニックスや、ピロウ椰子の梢が見え、ここが亜熱帯であることを示している。梢のむこうに、青い海、水平線のなかばには、まるで富士山のような火山性の小山が見えている。

正面の奥、下手に、二階に通じる立派な階段。

下手に、隣室食堂に通じる出入口。窓以外の壁面には、大きな写真が掛けてある。中央の右のは、故人となった工学博士、三村憲太郎の大礼服姿。後の総ては、三村珠代夫人の、マダム・パタフライの扮装のもの。

上手奥に、古風な、グラント・ピアノ。あと、ソファー、椅子、テーブルなど。
古風な飾り台の中には、世界中の国王から夫人に贈られた金メダルなどの記念品が、一杯つまっている。午後、三時頃。

幕あくと、看護婦兼家政婦の北林と、土地の老女、マサとが、三村夫人の写真額を、はずしている。

マサ (渡しながら) いいですか？

北林 ええ。(咳きこむ) ひどい埃！

マサ すみませんね。

北林 静かにやってちょうだいよ。

マサ はい、はい。

二階から、リキが額を一度に重ねて持つて来る。
リキは大女で、寡黙な女。黙って額を置き、行かかかる。

北林 ちよいと、リキさん、これどうするの？

リキ かけるんですって。(去る)

北林 なら、いつてくれなきゃ、いつでも黙って置いてくんだから……。

マサ (外しおえ、リキの持って来た額を見つけて)

まあ、これ、なんですかね。

北林 ふ、ふ、ふ、さあ、これかけるのよ。

マサ これ、かけるんですかい？(と、その額が、やぐざ姿の旅廻り役者の写真なので驚く) これまた、ずいぶんと変ったものだね。(と見ている) これも、三村先生の舞台かね？

北林 ちがうちがう、こんなオペラがあつて耐えるもんですか。

マサ オペラ、オペラって何だね。

北林 オペラってのは。まあ歌ね、先生よく、歌ってらっしゃるでしょ。

マサ ああ、あの歌かね、そうかね！

その時、東海林太郎、歌うところの古い流行歌『旅笠道中』が聞えて来る。へ亭主持つなら、やぐざは、およし、とかく、やぐざは苦勞の種よ……

……。といった、このかつてのプリマドンナの家に、およそふさわしくない歌である。

マサ あれが、オペラかね？

北林 ちがうちがう、さあ、早くかけて帰ってちょうだい。きょうはこれから、お客さまなんだから。

マサ そうかね、東京から？

北林 そう、もう本島に、飛行機着いたところ。あら、三時、こうしちゃいられない、さあ、マサさん、急いで！

マサ はい、はい。(と四辺、片づける)

北林、階段に行き、上へ、どなる。

北林 先生！ 先生！ お化粧に夢中になつていらつしやる。(少し昇つて) 三村先生！ 先生！ もう三時でございますよ、みなさん、おっつけ、いらつしやいますよ。

やつと、レコード止まり、

三村 (声のみ) 今、行くわよ、そうどならないで。

北林 ああ、お薬も召上ってください！ フステ

ル！

三村 わかつてるわよ。(出て来る) どう？ 私の

化粧、二十も若く見えるでしょ。(マサ、そうは見え

ぬという表情。三村たちまち額を見て機嫌よくなり)

まあまあ、こうすると、壮観ね。(と眺めている) あ

ら、主人の額、どうして残したの？

北林 だって、これはまさか……。

三村 あら、私の、一枚残してもいいから、これは

しまつてよ。

北林 さようでございますか。

三村 私はね、この主人に、きょうこそ、思い知らせ

てやるのよ。

北林 まあまあ。

三村 そうよ、こんな人、この人は、私をだましたん

ですもの。

北林 そんなことをおっしゃってバチが当たりますわ

よ。

三村 いいえ、私は、この人のおかげなんてことは、全然考えたくないの。

北林 はい、では、マサさん。

マサ はい。

北林 これ外してください。

マサ はいはい。

三村 マサさん。

マサ はい。

三村 あなた、この人覚えてない瀬川燕之丞！(と、写真を指す)

マサ さあ。

三村 あなたは知ってるはずよ。今から二十五年前、家の旦那さまが亡くなった翌年来て、ここに半年もい

た人ですもの、思い出せない？

マサ え？ 旦那さまが亡くなった翌年に来た？ さ

てね、こんな恰好していましたかね？

三村 まさか、これは舞台姿よ。これから素顔が想像出来ない？

マサ さて、私にや覚えがないですね。

三村 (見廻し) まあ……うん、これが一番素顔に似

てるかな、この人覚えてない？

と肌脱ぎして、刺青を見せたのを示す。

マ サ ああ、わかった、ひどい荒れの日に、本島から泳いで来た旦那ではないかね？

三 村 そうそう、そうよ。

マ サ そうだそうだ、この旦那は、ひどい人だよ、お山にいたノスリ（タカの一種）を毎日、鉄砲で撃つて、とうとう一羽も残さないで、根絶しにしてしまつたわけね。おかげで、あれから野鼠が増えて……。

三 村 そう、乱暴な人だったわね。

マ サ へえ、あの人は、こんな恰好して、役者だったのかね。

三 村 そうよ。

マ サ へえ、遊び人かと思つてた、入墨なんかして……。

リキ人って来る。

リ キ 今本島から、電話かかりました。（去ろうとする）

北 林 それで？

リ キ （何か、という表情）

三 村 船が出た、というの？

リ キ はい、二十分前に。（去る）

北 林 あの人ときたらちゃんと取次いだめしがないんだから……。

三 村 さあ、いよいよみんな来るわ、あと十分で。（ベランダに出る）あ、来る来る、ミムラ丸が見える。

マ サ じゃ先生、失礼します。（去る）

両 人 ご苦労さん。

北 林 さあ、先生、お召し替えなさらなくちゃ。

三 村 （耳に入らず）ねえ、ミムラ丸を、白く塗っておけばよかったわね。そうすりゃ、きょうにふさわしかったのに……。とある晴れた日……を口ずさむ）

北 林 そのお召し物でよろしいんでございますか。

三 村 ああ、あの船に私の運命が乗ってるのね、そうでしょう？

北 林 さあ、先生、お急ぎください。

三 村 (急に室内に入つて来る) あつ、そうだ、そう
だ、こうしない?

北 林 はあ。

三 村 私、今とってもいいこと、考えついたの。

北 林 そうでございますか。(と、とり合わない)

三 村 あなたが私になるのよ。

北 林 はあ。

三 村 そして私があなたになるの。

北 林 さあ、先生、急ぎませんと……。

三 村 これは素晴らしい考えよ。

北 林 さあ、二階へ参りましょう。

三 村 ちよつとちよつと聞いてよ、聞きなさい。(と、
坐らせる) いいこと、これからやつて来る連中は私の
ことほとんど知らないわ。もし知っていても、二十八

年前の引退前の写真ぐらいなものね。今の私なん
か、知ってるもんですか。だから、あなたが、私にな
るのよ。

北 林 まあ……私が……何のためでございます。

三 村 だって、そのほうが便利じゃない。

北 林 便利?

三 村 そうよ、あの連中の本当の声が聞けるわ、私は
かげ口が聞きたいの、面と向つていう言葉なんて、み
んな噂ですものね。私はかげ口の方を信用するわ。私
はあなたになるの。この家の家政婦の北林でございま
すと、いつてやるわ。そしたら、みんな安心して、自
分たちの仲間だと思つて本当のことをしゃべるわ、
ね? そうじゃなくて?

北 林 そりゃそうでございましょうけど……。

三 村 そうでしょ、ね、名案でしょ? やっぱり名案
ね。私、どうしてこんないいこと、考えたのかしら。
(と、ひとりで悦に入る)

北 林 でもね、実際にやりますには難かしゅうござい
ましよ。第一、私はとても無器用で嘘つてことが、ま
るつきり下手なのでございますから……。

三 村 それなら私だって同じことよ。でも、正直にし
て来たら、私は、うちの主人にだまされて、こんな
はじめなことになっているのよ。ねえ、今度は思ひい
きり嘘をついてみましょう、きつと面白いわよ。

北 林 でも、バレましたら……。

三村 その時はその時よ、本当のことを話してしまえばいいのよ。みんな大笑しておしまいになるわよ。それでも怒るなら怒らせておけばいいんだわ。ねえやりましょう。やって！

北林 先生は本当に、いつまでも気がお若いんですね。

三村 今に始ったことじゃないわ、ね？ 北林さん、やってくれるんでしょうね。

北林 さあ。

三村 ほら、もうエンジンの音が聞えて来る、早くしなきゃ、早く、早く。

北林 そんなことが出来ますかしら。

三村 出来るわよ、あなたは耳の遠いお婆さんで、みんな私が取次ぐことにすりゃ、いいのよ、私に任せとおけばいいの、さあ、早く早く。

兩人階段を上りかける。

北林 ああ、先生、だとしたら、この写真はいけませんか、わかっています。（と、三村のマダ

ム・バタフライを指す）

三村 じゃ、早くかえて。

北林 やっぱり旦那様のをかけることになりますかね。

三村 だめよ、あんな嘘つきのなんか。（二階に行く）

北林 でも、他になけりやしょうがありませんでしよ、（とブツブツいいながら、懸けかえ終つて、足を踏みはずし、転倒する）ああ、いたい、助けて助けて。

リキ （入つて来る）

北林 私、足を捻挫したわ、捻挫したわ、ああいたい、いたい。

三村 （声のみ）北林さん、どうしたの？ 何をさわいでるの？

リキ、急に北林を抱え二階に昇つてゆく。

北林 いいえ、たいしたことはありませんけど、捻挫でございます。ちょっと、ひっくり返りまして。（入る）

ギャギャ人々の声、ベランダに大勢現れる。

マサ ここだよ。

近見 や、ありがとう。

マサ ここから入ったら、いいでしょ。

近見 そうかね、ごめんください、ごめんください。

マサ あれ、いないかね、おーいお客さま来たよ、おーい。

小山 いやじきに見えるだろう。いや、お婆さん、ご苦労さん。

マサ 入って待ってるといいですよ、すぐ来ますよ。

(と入る)

近見 じゃ、入りますかな。

小山 そうしよう。

近見 ふん、だいぶ変った建物ですな。

小山 そうだね、こりやまた並べたもんだな。(と、

瀬川燕之丞の写真を指し、笑いあう)

マサ これは、あんた、二十五年前に、ここに半年もいた役者ですよ、乱暴な人だね。ああ、これがあん

た、ピアノってもんだよ、いい音がするよ、この家には珍しいものがうんとあるよ。何しろ、三村先生が歌の大先生だからね、歌を歌って、外国の天皇陛下様から、いろいろと褒美を貰ってね、それが、みんなここに並んでんだよ。これが……。 (と説明しようとする)

三村 (現れる) まあ、みなさん、よくいらつしやいました。

マサ ああ、来なすった来なすった。先生、おれが案内して来たですよ。

三村 そう、ご苦労さま、マサさん。用事がある時は呼ぶわ、引取ってちょうだい。

マサ はい、はい、ご用の時はいつでも来ますよ。じゃ、みなさん、サヨナラ。(去る)

近見 三村先生でいらつしやいますか、私……。 (と名刺を出しかかるので、小山も続く)

三村 あ、三村先生はただいまおいでになります。さあおかけになりまして、どうぞどうぞ。私は、北林と申します。先生の何と申しますか、看護婦兼秘書とでも申せばよいのでしょうか。

近見 ああ、そうですか。

小山 今の婆さんが、あなたのことを、先生、といったものでね。

三村 (あわてて) ああ、私が時々、診察なんぞしてやりますもので、それで先生といってくれますの、ほほ……。あの、お名刺いただけますか？

近見 ああ、どうも、これはこれ。

三村 ああ、あなたが興国探偵社の社長さんの近見さんでいらっしゃいますか。お手紙では、何度もね。でも、こうしてお目に懸るのはね。まあまあ、社長さんおん直々に、よくこんなところまで来てくださいましたこと。

近見 いや、こりや近來にない難しい調査でして、大分苦労いたしました。しかし、まあご期待に副える結果になったつもりでおりますよ、何しろ、十名、見つけたのですから。

三村 まあ、そうですか。三村先生も、お喜びでございましょう。二三人みつければいいけど、なんてとても心細いこといってらしたんですよ。

近見 昨日になって、また一人みつかったりいたしま

してね。

三村 さようですか。

小山 (咳払い) 私、東亜人事調査所の所長の小山です。(と名刺を出す)

三村 まあ、どうも、まあ小山さんでいらっしゃいますか。あなたもご自身で、そうですか。

小山 いや、興国探偵で近見君、自ら伺うと聞きましたのでね、我が社でも、そりややっぱり対抗上、私が出向きませんとな。

三村 そうですか、それでお宅のほうじゃ、いくたりみつてくださいました？

小山 はい、そりや数におきましては、六名でして、興国探偵より四名少いですが、しかし、この種の調査はとかく、インチキと申しちゃ何ですが。

近見 え？ 小山君、うちの調査は確かですよ。

小山 うちで、インチキと見破って連れて来なかったの、で、君の会社はかき集めているんだぜ。

近見 そんなことはないです。うちじや確信があるから、連れて来たんですからね。

小山、近見、言い争う。

三村 まあまあ、それより、ペランダにいるみなさんを入れて上げてくだいません？ その間に、私、先生のご様子見て参りますから。（去る）

近見 はいはい、そうしましょう。おい、みなさん、中へ入ってください。

小山 うちの人たちも中へどうぞ。

ガヤガヤと、十六名の男女が入って来て、結局、会社別に並ぶ。浜口一人だけ、別の方にいるのをみつけて、

近見 何も、君、そっちへ行くことはないだろ。

浜口 椅子の関係ですよ、じゃ。（と、椅子ごと移動する）

近見 今、三村先生は、いらっしゃるそうです。

小山 今、秘書の人が迎いにいつてるわけだ。

みんなガヤガヤと、写真を見て笑っている。

近見 静粛に静粛に、諸君、よくお聞きなさい。諸君

は私どもの社員が今回のお話を持っていった際、半信半疑だったようですが、現にここまで来て、このミムラ島に上陸して、はじめてこの三村家の財産が莫大なことがわかりだと思ふのであります。この三村島は、その名の通り、すべて、三村家の財産であり、この家屋、家屋と申しますか、この壮麗にして豪華なる建物は、何にたとえますかな。

浜口 トルコ風呂！

みんな笑う。

近見 君！ そういう発言は損ですよ、諸君は、出来

るだけ三村先生の心証をよくすることが、身のためだと思ひますね。

小山 私も全く同意見だね、この際、軽挙妄動は慎むべきだと思ふね。

江上 何いつてるんだ、だまされたと思って、観光旅行のつもりで、ついて来なさいといったくせに。

ガヤガヤ。

近 見 へえ、小山君のほうじゃ、そんなこといったのですか。

小 山 私はいわんが、社員がいったかもしれんさ。しかし、この際、ともかく、連れてくるのが先決問題だったんだからな。

近 見 我が社は、そういうインチキなことは、いいませんでしたね。うちは誠心誠意が、永年のモットオですからね。

小 山 しかし、ここをトルコ風呂だなんて、形容する人はうちのグループにはいない。

ガヤガヤ。

三 村 (車椅子を押して降りて来る) みなさん、お待たせいたしました。三村先生は、もうお年ですので、お耳も遠いし、それに、お口もおききになるのも大儀だとおっしゃいますので、お顔だけ、お見せになりま

すから、どうぞ悪しからず。

近 見 そうですか、お手紙では、まだまだお元気の様子でしたけれどね。

三 村 はあ、急に、このところ、お弱りになりました……。

小 山 この、やはり、高血圧、といったご病気ですかな。

三 村 はあ、そういうわけでございます。

リキ、北林を抱えて降りて来るので、三村も少し手伝い、車椅子に坐らせる。北林はすっかり病人らしく装っている。リキは去る。

三 村 こちらが、三村珠代先生でいらっしやいます。

先生が、世界的声楽家でいらっしやることは、みなさまご存じでしょうね。

みな挨拶、北林、三村に合図する。

三 村 では、私が、三村先生に代りまして、ご挨拶申